

---

甘いケーキを貴方に.....

鶴

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

甘いケーキを貴方に……

### 【Zコード】

Z9579A

### 【作者名】

鶴

### 【あらすじ】

ケーキ屋でバイトしている私。私が毎週土曜日に必ず働くその理由は……？

私はいつもの様にケーキを売る、甘くて美味しいケーキを。

誰のため？それは勿論お客様の為。

……建前はね。ホントは貴方の為、なんだよ？

\*\*\*

「彩ちゃん、ケーキ棚に移しといてー。」

「はーい。」

私は今出来たばかりのケーキを運びながらそれらを眺める。クリームがたっぷり塗つてあるロールケーキ。見てるだけでほつぺたがところけそうな位美味しそう。お客様に綺麗に見せるように角度を整えて並べる。

私こと月島 彩がこの店で働き出してもうすぐ一年が経とうとしていた。

元から甘いものに目がない私は大学入学後にたまたま通りかかったこの店に心奪われ、即日面接、即日合格を果たした。

それからはせつせと働き、今じゃこの店の看板娘つて感じ？

大体週4日で働いてる。シフトが代わったりするけど土曜日だけは必ずバイトに出る。どうしてかつて？それはあの人があるから。

いつも土曜日、午後6時に。

カラシカラーン。

「いらっしゃいませ、優さん。」

「はい、いらっしゃいました。」

榊 優さん。初めて出会ったのは3ヶ月位前かな?……私の一日惚れ。名前通りの優しい瞳にやられました。

優さんは毎週必ず午後6時にやってくる。ケーキを買いに。

「今日のお勧めはどれかな?」

「え?と……あ?、今出来上がったロールケーキなん?どうですか?」

「お?、美味しそうだね。」

ガラスケースを眺める姿は新しい玩具を欲しがる子供みたいに可愛らしい。1つ年上らしいけどちょっと子供っぽいところも惹かれる。

「よしつ、じゃあロールケーキ2つね。」

「……はーい。」

2つの理由は簡単、1つは自分の、もう1つは……彼女の。いつも『2つ』って言わると胸がキュートで締め付けられて痛くなる。なんだかそれが一人の『証』みたいで切なかつた。いつもケーキに問いたいもの。

『一人はどんな顔をして貴方を食べてるの?』

つて。

店から出ていった優さんを眺めながら、私は小さく溜息を吐いた。

\*\*\*

あれから2ヶ月、毎週やつてくる優さんに私はケーキを売り続ける。いつもの様に『2つ』。

最近は雨がよく降る様になつた。梅雨のせい? それとも私の心を映してるので?

今日も土曜日が來た。あの人には彼女がいる。そんなのわかつてゐに……会いたい。

時計の針が真っ直ぐになる。いつもの様に扉が……開かない。珍しいな、遅れるのかな?

私はテーブル拭いたり、ケーキを運んだり、お客様にケーキを売つたりしてたけど優さんが来るのを心待ちにしていた。

けど……この日は結局優さんが店に現れることはなかつた。

次の週、その次、そのまた次も優さんはやつてこない。私は足りない頭をフル回転させていた。

私、なんかしちゃつたかな? それともケーキに飽きたのかな? ……まさか事故!?

考えれば考えるだけ泥沼に入つていく感じ。今の私の頭の中はメレンゲを作るみたいにかきませられてる。

ねえ、どうして来ないの？髪型変えたんだよ？ルージュも新しい色にしたんだよ？

全部、全部優さんに見せるために。少しでも何か言つてもういたい、たとえ優さんに彼女がいても……会いたいよ。

私は彼女がいる優さんに心底惚れてしまつたみたい。優さんに溺れてる。

＊＊＊

優さんがこなくなつて1ヶ月が経ちました。相変わらず私は土曜日にバイトを入れてる。もしかしたらもう会えないかも、という一抹の不安を胸に溜め込んで。

そんな不安を拭い去つてくれたのは夏の夕方、勿論土曜日。外では夕焼け放送が流れ、小学生達が大通りを駆けてゆく。私は看板にライトを灯しながらそんな微笑ましい光景を眺めていた。

小学生が走つて行くほうからゆっくり歩いてきた人物に、私の呼吸が止まりそうになつた。

「やあ、久しぶり。」

「ひつ、久しぶり、ですね、優さん。」

ちよつとちよつとかえながら挨拶を交わす。優さんはやつぱり何も変わっていなかつた。

私は優さんを店に誘導してガラスケースの向こう側へ戻つた。

「今日のお勧めは？」

「今日ですか？」「へん……」

ケーキのことより優さんと話をしたいのに……なんて思いながら並んだケーキを確認する。

「あつ、これこれ。最近店長が作ったオレンジムースのケーキ。夏蜜柑を使つてるんですよ。」「へえ、夏蜜柑か。俺蜜柑好きなんだよね。」

嗚呼、今すぐにでも私は蜜柑になりたい。

「じゃあこれを一つ。」「……はい？」「いや、だからこれを一つ。」「？」

私の頭の中はパニックを起している。

「?、どうしたの?」「あの?……どうして一つなんですか?」

私の問いに少しだけ眉をピクッとさせた。

「……別れた。」「……え……」

そのまま沈黙が続いてしまつた。どうしたらいいかわからずにつづけずケーキを箱に入れる。

ケーキの代わりにお金をもりつて優さんは入り口へ向かう。彼の優しそうな目に少しだけ寂しさが残っていたのに気付いた。

「あつ、あのつ……」

「気づけば私は叫んでいた。

「さよ、今日は「」で食べていきませんか?」

優さんはポカンとしていたけど少ししてから笑みを浮かべた。

「じゃあやうしそうかな?」

\*\*\*

店長さんの気遣いで私はバイト中なんだけど、今優さんの向かいに座っています。

甘いミルクティーを飲むわけでもなく、ストローでかきまぜる。氷のカラシソテ音だけが鳴つた。

「……別れたのは1ヶ月前なんだ。」

丁度優さんが店に来なくなつた日。

「確かに前々から別れそつた雰囲気だつたんだけどさ。」

ハハツと自嘲氣味に笑う顔を見るのは少し切なかつた。

「…………え、と。なんで……彩ちゃんが泣いてるのかな？」

「…………え？」

私は無意識のうちに泣いていたらしい。私の涙は零となってケーキの上に落ちる。

「…………ほり、泣くなよ。」

優さんは私にハンカチを渡した。涙を拭いながら、不謹慎だけどちよつといい匂い……なんて思つたりして。

「わあ、こんなしけた話はおしまーーーケーキ食べよっせーーー！」

私は黙つて頷いた。今日のケーキ、店長さんは失敗したのかな？ケーキなのに……じょっぱいや。

\* \* \*

「美味しかったよ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

私は一番の営業スマイルを作つてみせた。

「それじゃ。」

「待つて！！」

帰ろうとした優さんを引き止める。

「また……一緒にケーキ食べてもうりますか？」

優さんは笑顔だった。

「勿論。」

あれから3ヶ月。私は今日も土曜日のバイト。どうしてかつて？それは待つてる人がいるから。ちゅうと前までと時間は違うけど。

閉店前の音楽が鳴るころ、いつもの様に彼がやつてくれる。

「お待たせ、じゃ行こうか。」

「はーい。」

私はケーキの箱を持ち、彼の隣に向かつて歩く。ケーキはもちろん2つ。それが今の私と彼の『証』だから。

「今日のケーキは？」

「今日はねえ、やっぱり秋だからモンブランー！」

「いいねえ。モンブラン好きだよ。」

「じゃあ……私は？」

「もつと好きだよ。」

「えへへー。」

彼の腕にしがみつきながら頬の筋肉を緩ませる。今の私達は甘いケーキにも負けないくらい甘甘な愛を育んでいる。

私は今、毎週土曜日、彼の家でケーキを食べる。

昔ケーキに聞いたよね？多分いまの貴方ならこいつ答えるよね？

『私は今、貴方と貴方の大好きな人に食べられますよ。』

つてね。

(後書き)

タイトルに合わせておやつの時間に投稿です（笑）  
楽しんで頂けましたら幸いです。感想、評価、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9579a/>

---

甘いケーキを貴方に.....

2011年1月28日03時06分発行